サグラダ・ファミリア聖堂の建立提案者と初期理念に関する考察

STUDIES ON PROPOSER AND FIRST IDEA OF THE TEMPLO DE LA SAGRADA FAMILIA

鳥居 徳敏*
Tokutoshi TORII

This study deals with the proposer and the first idea of the Templo de la Sagrada Familia in Barcelona, by examining the origin and development of the Asociación Espiritual de Devotos de San José founded in 1866. As a result, it is made clear that Bocabella was not only the founder of the association but also the proposer of the temple, and not the father José Mañanet. From the beginning the purpose of the temple was very spiritual and symbolical as well as his association.

Keywords : *Barcelona, Sagrada Familia, Gaudí, José Mañanet, José María Bocabella, Spanish modern architecture*

バルセロナ, サグラダ・ファミリア聖堂, ガウディ, ホセ・マニャネット神父, ホセ・マリア・ボカベリヤ, スペイン近代建築

序 論

入江正之氏が指摘するように、アントニオ・ガウディ (Antonio Gaudí y Cornet, 1852-1926) に関する文献は膨大な量に達し、チュエッカ教授も「例外的なピカソを除けば、ガウディ文献はここ数十年の間に一人のスペイン芸術家の文献が達し得る限界を越えたと思われる」と述べる¹⁾。今日においても留まるところを知らないこの文献量の多さが、ガウディ建築に対する人々の関心がいかに根強いかを物語ろう。またガウディ建築は公的機関からも様々な認定を受けてきた。カサ・カルベッ、1900年度のパルセロナ市第一回建築年間賞、1914年、同バルセロナ市よりカサ・ミラの芸術的・記念碑的作品の認定、1969年、スペイン政府よりほぼ全作品にわたるガウディ建築の歴史的・芸術的モニュメント (日本の国宝・重要文化財に相当) の指定、1984年、ユネスコよりグエル公園とカサ・ミラの世界文化遺産の指定。こうしたことはアテネのパルテノンやグラナダのアルハンブラ宮殿と同じく、ガウディ建築が後世に影響を与え続けるであろうことを推測させ、ガウディ建築は常に研究対象になり得る建築のように思える。

確かにガウディ文献は大量に存在する。しかし、これらを具に調査した経験のある人なら誰しも、その大部分が新聞や雑誌に掲載された単なる記事かエッセイ、あるいは旅行案内記、写真集、初心者用の紹介本の類であることに気づくであろうし、真に研究に値する書物は決して

多くはないと思うに違いない。研究書に値する本でも、各研究者によって作品の年代設定が異なったりし、どこまで確かな資料に基づいて論述されているのか疑問に思えることもしばしば起こる。それゆえ、歴史家のロッホ・アルバランからは、「われわれはガウディについて実のところ何ら知らないままにいる」²⁾と厳しい指摘まで受けている。しかし観点が変われば、そしてそれが独自の観点であればあるほど、たとえ重要な研究であろうとも、既存の研究が常に有効であるわけではなく、疑問を抱いた自らが解決しなければならないことも事実であろう。ロッホの論文もそうした研究の一つとしてとらえられる。ガウディに関する大部分の一次資料は1936年のスペイン内戦勃発時に焼失している。このことが研究の基礎を不確実なものにしている主要因であろう。しかし、一次資料に匹敵する当時の資料は至る所に存在するはずであろうから、こうした資料に基づくガウディ研究の再構築は必要不可欠に思える。ガウディの代表作の一つであるサグラダ・ファミリア聖堂についても、建設された部分やガウディが辿り着いた最終案についての研究は多く見られるものの、しかし、着工前の前史、建設過程の正確な歴史的記述、聖堂の経済的基盤の論述、あるいは、ガウディが聖堂最終案に達するまでの発展過程についての研究など、この聖堂を理解するためにはまだまだ多くの研究すべき問題が残されている³⁾。

本稿はそうした明らかにしなければならない問題の一

* KMG 建築事務所

KMG Architects & Engineers

つ、聖堂の前史を扱う。建築創作における形態以前の理念の重要さは誰もが認めることであろう。しかし、建築はそれが建設された時代を反映する文明の象徴とも言われる。これは時代や地域によって異なる材料や建築術などの違いだけでなく、社会情勢や文化の相違なども反映することを意味しようし、歴史的な存在であるわれわれが必然的に時代の産物であるよう、建築創作における建築家の理念も必然的にその時代を反映せざるを得ないことを意味しよう。また建築家は、ディベロッパー的建築家などの例外を除き、自らの意思で創作できるものでなく、社会の要請があり、オーナーの依頼があって初めて建築創作に入ることができる。したがって、社会の要請を背景とした依頼主の意思も尊重せざるを得ないから、この点でも社会の要請が建築家の理念に反映することになる。こうした意味で、サグラダ・ファミリア聖堂の前史の研究とは、建築家の理念に反映したに違いない当時の文化や社会の要請や依頼主の意思などを明らかにしようとするものである。しかも聖堂の起源に関しては、誰が聖堂建立の提案をしたのかという問題が提起されている。1965年、カサネーリエスが提案者の問題にからめて聖堂の起源の研究の再構築の必要性を訴えたように⁴⁾、この問題は決して過小評価されるべきものではない。なぜなら、殊にこの聖堂に関しては提案者如何によって聖堂の性格が別のものもなり得た可能性があり、この性格が異なれば、今日知られている未完の聖堂にもなり得なかったかも知れないからである。なおかつ、当時の社会情勢に基づいた聖堂建立の提案者の理念がガウディの理念に反映され、それが現在知られる聖堂に具現されているからでもある。それゆえ、本稿では聖堂提案者の問題に焦点を当てながら、当時の社会情勢なり、われわれ日本人にはなじみの薄いカトリック的思考法や聖堂建立の提案に至る過程を明らかにすることを含めた聖堂前史の正確な歴史的記述を主要目的とし、その結果として、当初の聖堂理念なり、性格をより一層明確にしようと思う。本稿の研究手法は一次資料、すなわち聖堂の建立母体であった「サン・ホセ帰依者の精神的な協会」⁵⁾の機関誌「サン・ホセ帰依の布教」⁶⁾を徹底的に調査することに基礎が置かれた⁷⁾。

聖堂建立母体「サン・ホセ協会」発展史

聖堂が建設されているバルセロナはカタルーニャ地方の首都であり、同地方は十八世紀終わり頃から産業革命を導入し、当時の先進諸国並の工業化を推進することにより、現在の繁栄の基礎を築いた。この産業革命の導入は富の蓄積に貢献する一方で、持つもの（資本家）と持たざるもの（労働者）との間の貧富の差を生み、急激な人口増加を可能にすると同時に、貧しい農村部からは産業の集中する都市部に人口が流出し、都市は前代未聞の

膨張を経験した。すべてが急激に変化し、混乱した新社会情勢から、低賃金・長時間の労働条件、未成年労働力、公衆衛生、悪質な労働者住宅、都市整備、教育制度、宗教心やモラルの低下の問題などが続発し、これらは産業革命がもたらした簡単には解決できない難問題になった。文明の象徴と言われる建築を実現するためには、社会的な富の蓄積が前提条件であろう。しかしこの聖堂に関して言えば、その建設に導いた動機は近代のカタルーニャの富の蓄積にあるのではなく、産業革命によって派生した否定的諸問題にあった。産業革命は科学的思考の結実であり、ある意味で科学の勝利の証であった。この科学的思考こそが神の存在を否定する方向に導き、人々の信仰心を揺るがし、カトリック教会の権威を失態させた。それ故ある人々は、産業革命によってもたらされた諸悪の根源は宗教心のうすらいだ不道德な世相にあり、混乱した社会秩序を正常化するためにはかつての宗教心を取り戻し、カトリック教会の権威を回復しなければならないと考えた。そして、こうした社会情勢を許したのは救いの神を眠らせ、自らの欲望のなすがままの結果であるから、再度正常で平穏な生活を取り戻すためにはカトリック教徒たちが本来の信仰心に目覚め、神に祈らなければならないと言い、次のような提案をする。「それ故、(カトリック)教会は信者たちに祈ること、根気よく祈り、われわれが経験している苦難と試練のこの時代に熱意をもって祈ることを勧める。…聖人たちは天と地を取り持つ強力な仲介者であり、彼らの仲介により人類の惨めさを救うための神の慈悲が注がれる。そして、聖母マリアはすべての聖人たちに君臨する女王の座にあり、…清純なその夫、この地上での遍歴の間、人類の御言葉イエス・キリストに父と呼ばせたホセ⁸⁾も、彼女と共に特別な影響力を持つに違いない。…であるから、われわれはサン・ホセにすがろうではないか。カトリック教会の庇護のもと、社会のため、われわれは彼に尊い加護を嘆願しようではないか」⁸⁾

こうした主旨をもって、1866年9月、バルセロナで宗教関係の出版と書店を営むボカベリャ José María Bocabella (1815-92) は、顧問役のメルセッド(メルセス)会修道士、後の同会長、ロドリーゲス José María Rodríguez (1817-79) と連名で、後のサグラダ・ファミリア聖堂の建立母体になる「サン・ホセ協会」の設立をバルセロナ司教 Pantaleón Montserrat 卿に申請。同年10月1日、この協会の設立と協会機関紙『サン・ホセ帰依の布教』の出版とが同司教より認可される⁹⁾。この協会設立のボカベリャの直接的な動機は、四年前からフランスで出版されていた同名雑誌のスペイン語版の発刊にあった。その雑誌を詳細に検討しているうちに、自らの手で同様の雑誌を出版しようと決意し、ロドリーゲス師に相談し、この神父が機関誌の編集長を引き受け

ることになった¹⁰⁾。したがって、この協会の設立はボカベーリヤの職業とは無縁ではなかったし、一介の書店主が何故サグラダ・ファミリア聖堂の創建者になり得たかの第一理由がここに見出される。この協会の正式名に「精神的な協会」が謳われているように、同会は目に見える団体行動にでることを目的とせず、また本部や本堂とかの物理的な形態も持たない極めて抽象的な協会であり、会員に課せられた義務は次の五項目に過ぎない。1. 毎日、主に祈り、われわれの庇護と、教会と法王の加護をサン・ホセに祈願すること。2. 協会の会員章を胸に下げること。3. すべての祈りで、教会と法王の要求が満たされるように、また会員と故会員のために祈願すること。4. イエスとマリアとホセに宿る一つの魂、一つの考えに参与するよう、自らのすべての慈善行為を同胞の慈善行為に合体すること。5. 聖なる家長であるホセへの帰依布教を、自らの義務と化すること¹¹⁾。

「サン・ホセ協会」は司教に承認された団体とはいえ、カトリック教会とか、修道会とか、あるいは地方自治体などが組織する協会ではなく、財力も権力もない単なる民間団体にすぎない。そして、そうした協会員を繋ぎ合わせる唯一の媒体が機関誌「サン・ホセ帰依の布教」であり、この機関誌だけが協会の具体的な形を取った。それゆえ、この機関誌を出版するボカベーリヤの書店が協会の本部という何とも心もとない団体でもあった。しかし、機関誌の届くところならどこでも会員獲得の可能性があり、機関誌はスペイン語で書かれ、同語圏の国、すなわち、本国スペインのみならず、中南米からフィリピンまでもが協会の対象国になり得た。ボカベーリヤは成功することしか考えず、機関誌創刊号（1866.12.8）を八千部も刷ったのだから、二百人しか予約購読者が得られず、大失敗に終わる。しかし、別表に見るように発行部数は1872年に一万二千部に達する。だが、この時のフランス語版の同名雑誌の発行部数二万七千部と比較するならば、モデルになった雑誌ほどに成功しなかったと言えるであろう。ただし機関紙の購読が会員の義務ではなかったから、この発行部数がそのまま会員数を意味するのではない。事実、会員数の方は1868年の三万から78年の六十万へと確実に増加していった¹²⁾。78年のバルセロナの人口二十五万と比較するならば、会員数は驚異的であり、当国では最大の会員数を誇る協会になった。

「サン・ホセ協会」の目的の一つはカトリック教会の権威を回復させることにあり、その一方策として法王庁の財政再建に寄与することが具体的な重要課題と考えられた。しかし会員たちの大部分は貧しく、会費を納める義務もなかったから、この会員数に比例して協会の財政が潤うことはなかった。ここでも協会設立者の職業が最大限に生かされた。会員たちに課せられた義務の祈りに利用された祈禱書をボカベーリヤは出版しており、こう

別表 「サン・ホセ協会」の発展

発行年月日	機関誌発行部数 () 購読予約者数	協会員数	法王庁への献金 (ペセタ)	
			一回の金額	累計総額
1868.01.08	—	—	2,027.5	—
1869.01.08	—	30,000	—	—
1869.11.08	6,000	70,000	—	—
1870.11.08	8,000	200,000	10,000	—
1871.03.08	9,000	—	—	—
1871.11.08	12,000	300,000	30,000	—
1872.06.21	—	—	10,000	—
1872.12.08	12,000	400,000	—	92,500
1873.02.08	—	—	25,000	—
1874.02.17	—	—	17,000	—
1875.04.08	—	500,000	34,000	—
1876.03.19	—	500,000	25,580	—
1876.12.08	—	550,000	—	—
1877.02.08	(11,000)	500,000 以上	—	—
1877.05.08	—	500,000 以上	25,735	—
1877.07.08	12,000	500,000 以上	—	180,000
1877.12.08	—	700,000 (?)	—	—
1878.02.08	—	581,000	—	230,000
1878.06.26	(11,000)	600,000	27,800	232,000
1878.12.08	—	608,000	—	—
1879.03.08	—	—	7,500	—
1880.04.08	—	—	10,250	—
1880.11.08	(11,000)	—	—	220,000(?)
1881.07.08	—	—	22,000	—
1881.12.08	—	660,000	—	—

した祈禱書は協会設立から十年後の1876年までに二十種以上、合計発行部数三十万部に達し、翌年には約三十五万部に及んだ¹³⁾。機関誌を含めたこうした出版での収益すべてが法王庁に献金されたのである（別表）。法王庁への献金が功を奏し、1870年に法王ピウス九世（在位1846-78）が、79年に次期法王レオ十三世（在位1878-1903）が協会に入会した¹⁴⁾。しかし、こうした成功の影には個人的な努力とは無縁な歴史的な特殊事情も絡んでいた。69年から72年にかけての会員数の急激な増加に注目していただきたい。1870年第一回バティカン公会議がローマで開催され、同年12月8日には法王ピウス九世がサン・ホセをカトリック協会の守護聖人とする法王令を公布していたのである。この法王令がサン・ホセへの帰依を一種のブームにさせ、ボカベーリヤの協会の成長に貢献したことは否定できない事実である

う。このブームは正しく冒頭で述べた社会情勢に基づくものでもあった。なぜなら、サン・ホセは無原罪の聖母マリアが身籠った神の子イエスを自らの子供と認知した信心深い誠実な大工職人であり、社会の平和の基礎である家族の平安を保障する家長の鑑でもあり、職人という労働者であるにすぎないサン・ホセは虐げられた新労働者階級を保護する守護聖人として誠にふさわしい存在であったからである。

二人の聖堂建立提案者

ボカベーリャ自身によると、「サン・ホセ協会」の設立はモンセラット修道院で「聖家族^{サグラダ・ファミリア}のエジプト逃避」の絵を見た時（1865年）、サグラダ・ファミリア聖堂建立はイタリアのロレト Loreto のサンタ・マリア教会を訪れた時（1871年）、それぞれ思いついたという¹⁵⁾。ガウディ研究書では、この発言に何等の検討も加えられず、定説のように繰り返されてきた。しかし、一見するだけでこれらの説が神の御意向に従うという余りにも定式化された作り事のように思われる。「サン・ホセ協会」の設立に関しては前節で見たように、薄らいだ宗教心という世相が社会背景にあり、ボカベーリャの宗教関係の出版という職業が大きく寄与した。聖堂の建立提案に関してはガウディ研究とは無縁な分野の宗教界で全く異なる説が流布している。聖堂建立の提案はボカベーリャではなく、マニャネット神父によるというのである。この説の擁護派は青少年へのカトリック教育を目的としてホセ・マニャネット自身が1864年出身地のトレンプ（レリダ県）に設立した「サン・ホセ学院」、後の「聖家族^{サグラダ・ファミリア}イエス・マリア・ホセ修道士会」に所属する聖職者たちによって構成される¹⁶⁾。しかもこの説は、バルセロナ市が1967年に設置したマニャネット神父の記念碑に「サグラダ・ファミリア聖堂の発起人」と刻ませたように、市当局によって承認され¹⁷⁾、また聖堂着工百周年の記念式典（1982）でも、バルセロナ司教 Narcís Jubany 枢機卿、および現法王のヨハネ・パウロ二世の口からも公にされているのである¹⁸⁾。もちろん、これらの認知は前述した擁護派グループの影響力のなせる業であろう。この説に対するガウディ研究者側の反応は極めて鈍く、カサネーリエスなどの例外を除けば、研究者の大部分はこの説に無知・無視のいずれかであろう。

マニャネット神父説擁護派の根拠

マニャネット擁護派の最大の根拠は、第一回バティカン公会議（1870）の準備でローマに滞在していたセオ・デ・ウルヘル司教¹⁹⁾あての下記の神父の手紙（1869.6.24）に見出された。「私が思いつきました美しく信心深く思われる考えを猥下に申し上げたく存じま

す。／社会に不幸をもたらしている諸悪とその最適でもっとも有効な解決策について熟慮し、また猥下が次の公会議のため全世界の司教共々ローマ法王の座に集まっている折りでもありましたから、次のような聖堂建立の考えが私に起こりました。つまり、スペイン人の慈愛により建設される贖罪（罪をあがなう）聖堂の建立の考えで、その正面には世々代々記憶されるよう、『栄光の家長サン・ホセ、ローマカトリック教会の守護聖人、スペインの再建者』か、これに類似した銘を刻ませるといふものです。この建立の考えは極めて重要な公会議における栄光の家長サン・ホセの問題に関係するものと思えるからです²⁰⁾。

「サン・ホセ協会」の会員数がこの手紙の書かれた1869年に急増しているように、この時期のサン・ホセ信仰は急成長していたし、また、翌年のバティカン公会議でサン・ホセがカトリック教会の守護聖人に宣言されるであろうことも公にされていた。例えば、「サン・ホセ協会」の機関誌でもこのことが記載されている²¹⁾。それ故、マニャネット神父の運動も時代の流れのなかにあるといえる。また、産業革命発祥の地イギリスでは都市に集中した新労働者階級のための宗教・倫理教育が逸早く問題になり、1818年の法律に基づく政府援助により郊外に増殖した労働者地区に多数の教会堂が建設され、新たな宗教運動が展開していた²²⁾。スペインでも遅れたとはいえ同じような問題が発生し、特殊事情が重なった同国では1868年の革命で無数の教会建築が破壊された後、多数の教会堂や修道院などが再建・新築され、ネオ・カトリック運動の時期が到来していた²³⁾。事実、後述するようにサン・ホセに捧げられた教会堂がこの時期に西欧各地に建立されているのである。したがって、マニャネットの提案は時代の要請に従った一つの提案に過ぎず、特殊な提案であるとは言い難い。特殊な提案でなければ、この提案がボカベーリャの聖堂建立と直結する必然性はない。しかしながら、実を結ぶことなく消滅したマニャネットの提案が書かれた手紙の控え用写しには、次のような追記が見られた。「注：後にこの考えをバルセロナのプラ未亡人の書店であるボカベーリャ氏に告げ、氏はその考えを『サン・ホセ帰依の布教』で広め、有名なサグラダ・ファミリア聖堂に結実させた」。

マニャネットをよく知る擁護派の神父たちが認めるように、この追記は字体の癖、および内容からしても神父の晩年の前世紀終わり頃に記されたものであろう。この追記がマニャネット説擁護派の最大の根拠にされているのである。しかし、この追記が歴史的事実に合致しているかどうかの追調査がなされていない。問題になるのは、マニャネットが何時ボカベーリャに自分の提案を告げることができたかである。

追記に対するマニャネット神父の根拠

マニャネットの伝記によると、前掲の手紙の書かれた1869年までは神父とボカベリヤとの出会いは考えられない²⁴⁾。故郷のトレンプで司祭を務めることになったマニャネットは1870年3月19日(サン・ホセの祭日)自らの教区に「サン・ホセ協会」の支部ともいえるべき「サン・ホセの都」を設立し、サン・ホセ礼拝のための合唱団を作り、信徒たちにボカベリヤの協会から提供されたに違いない協会のバッチや祈禱書などを配布している²⁵⁾。これだけを見れば、両者の接触がこの時点で確立しているように思われるが、しかし機関誌の調査からは逆の結果が得られる。「サン・ホセ協会」の目的はサン・ホセへの帰依を布教することであり、そのための機関誌には「サン・ホセ信仰ニュース」の枠が特設され、毎号各地からのサン・ホセに関わる情報ならいかなるものも掲載された。サン・ホセへのミサは言うに及ばず、「サン・ホセの都」の設立などは貴重な情報になった。にもかかわらず、トレンプに関わる情報は一切掲載されていない。また、1872年12月号の機関誌には毎月19日のサン・ホセへのミサをあげている217の町が掲載された。しかし、マニャネット神父がミサをあげていたトレンプがこのリストに含まれていない²⁶⁾。したがって、1872年末まではマニャネットとボカベリヤとの間の個人的な接触は皆無であったと言わざるを得ない。

他方、マニャネット神父は青少年教育を目的とした修道士会の進展のため1872年5月バルセロナを訪れるが、政治情勢の悪化のため何の成果も得られず翌73年9月にトレンプに戻る。75年12月に再度バルセロナに戻ってからは徐々に彼の修道士会は発展する²⁷⁾。マニャネットがバルセロナを不在にした1874年2月から5月の四か月の短期間にボカベリヤの機関誌には四回もトレンプの情報が掲載された²⁸⁾。したがって、神父が初めてバルセロナに滞在した1873年中にボカベリヤとの初対面があったものと推測できる。しかも、トレンプの第二回目の情報が掲載された74年4月号の機関誌でサグラダ・ファミリア聖堂建立の提案が編集長ロドリゲス神父の手紙を通して初めて明らかにされた²⁹⁾。翌75年2月号では聖堂がバルセロナに建立されること、ロレトの教会堂の模倣であることなどがボカベリヤから具体的に提案される³⁰⁾。同年4月から76年11月まで、機関誌は聖堂の規模の説明やロレト教会堂の内外の図版を掲載し、聖堂建立の情報を一度たりとも怠ることがなかった。そして、「サン・ホセ協会」は悪戦苦闘したとはいえ、1881年に現在の建設地を購入し、翌82年3月に聖堂を着工させることができた。したがって、1869年にマニャネット神父がサン・ホセに捧げた聖堂を提案し、1873年にボカベリヤとの初めての接触があり、翌74年にサグラダ・ファミリア聖堂建立の提案がなされ、このと

きの提案が現在の聖堂建立に直結しているから、マニャネット神父には自分の提案がサグラダ・ファミリア聖堂に実を結んだと思えても決して不思議ではない。そう考えたからこそ、前述した手紙の控えに追記をしたのであろう。

マニャネット神父説擁護派に対する否定的根拠

前述したように、ボカベリヤの聖堂提案が協会機関誌で初めて公表されたのは1874年の編集長の手紙を通してであった。しかしこの手紙の説明に従うと、この提案はボカベリヤが以前から心に暖めていたものであり、時たま今回公表したものと言う。それでは何時ボカベリヤが聖堂建立の考えを抱いたかといえ、ガウディ研究者たちの間で定説とされているボカベリヤがロレトを訪問したときだと協会機関誌の1892年5月号は伝える³¹⁾。1871年11月8日、ボカベリヤは「サン・ホセ協会」を代表する総勢二十人の一人としてピウス九世に謁見、協会からの献金三万ペセタと聖家族の純金像(一万五千ペセタ)を法王に手渡す。それから九日後の17日、ボカベリヤは妻と娘と同家の司祭の四人で再度法王に謁見し、別れの挨拶をする³²⁾。この謁見からさらに九日後の26日、ローマからバルセロナへの帰路、ボカベリヤの一行は聖地ナザレから天使たちによって運ばれてきたと伝えられる聖家族の家が祭られているロレトの教会堂を訪れ、痛く感動する³³⁾。この時ボカベリヤは聖堂建立の着想を得たと言うのであるから、協会設立者は1871年11月26日に聖堂建立を立案したことになろう。前述したように、マニャネット神父は1872年末までボカベリヤとの個人的な接触はなかったから、1871年までに神父が自らの聖堂建立の提案を協会設立者に告げる機会は何もなかったはずである。

他方、マニャネット神父説を支える根拠として、神父の同僚が1919年に出版した次の記述があげられている。「サン・ホセの聖堂に寄進された最初の献金はわれわれの神父からのものであった。最初、神父にすべてのことが相談され、彼の考えが多分に評価された。しかし、おそらくふしだらな敵意が原因し、すべての問題から神父の関与が徐々に取り除かれていった」³⁴⁾。1965年には、マニャネットの修道士会の神父がある雑誌の投書記事で、「聖堂建設地購入のための最初の千ペセタはマニャネット神父によって集められたものであることを編集長はご存じですか。その上、聖堂建立の考えは誰よりも早くマニャネット神父によって提唱されたことをご存じですか」³⁵⁾と具体的な数字まで揭示している。

事実、聖堂への献金を促すトレンプあてのマニャネットの手紙が何通か残されている。その一通(1876.6.14)では次のような希望というか、野心が述べられる。「協会機関誌でご存じのように、サグラダ・ファミリアに捧

げられて建立されようとしている大きな聖堂の管理と礼拝がわれわれに任されるであろうことを期待している。サン・ホセがわれわれに、頑張れ、ひるむな、祈れ、働け、と言っているように思いませんか。ですから、祈り、働きましょう。スペイン、特にカタルーニャの栄光のため、サグラダ・ファミリアに捧げられたこの大記念碑ができるだけ早く実現されるよう可能なかぎり献金収集の努力をしなければなりません」³⁶⁾。また、聖堂が着工(1882.3.19)された翌月にも、「リエドス神父にサグラダ・ファミリア聖堂への献金を集める方法について書いておきました。同じ考えを推進してください。たとえ小額でも集まりましたら、送付してください」³⁷⁾という内容を含む手紙が書かれている。前述したマニャネット神父説の根拠がこうした資料に基づいているに違いない。しかし神父の努力にもかかわらず、少なくとも現在の建設地購入時(1881.12.31)までは一銭の献金も神父は集めることができなかった。なぜなら、協会機関誌には聖堂建立のための献金リストが1875年12月号、つまりロレト教会堂の模倣という具体的な聖堂提案がなされたときから毎号掲載されているのだが、このリストにマニャネットはもとより、トレンプからの献金も一度として登場していないからである。できるだけ多くの寄進者名を公表することが、取りも直さず会員たちの献金努力に刺激を与えることになるであろうから、いくら小額でもこの献金リストから除外されるはずはないし、ましてや千ペセタという高額ならば、なおさらのことである。

1877年2月、二度の建設地入手に失敗したボカベリャは、建設地購入に必要な資金を小額の寄進だけに頼っては時間がかかるばかりと判断し、『サン・ホセ融資』というシステムを考案する。これは、適当な建設地が見つかったとき、一人当たり250ペセタを提供するシステムであり、担保は購入された敷地、返済は寄進が集まりしだい、おそらく二年以内になろうというものである³⁸⁾。ボカベリャは二千人の融資者が集まれば、建設地が購入できると計算し、当時の会員数五十万に対し二千だから失敗するはずがないと判断した。しかし申し込み者は建設地購入時(1881)までに501人しか集まらず、この企画も成功しなかった。この融資者名簿も毎号機関誌に掲載された。しかし、これにもマニャネット神父の名前ばかりでなく、トレンプからの融資者名も一人として掲載されることがなかった。

協会機関誌から明らかになるこうした現実を前にしては、たとえボカベリャという信仰心篤い信者であろうとも、有言不実行のマニャネット神父を信頼するわけにはいかないであろう。こうした現実がボカベリャからマニャネット神父を徐々に遠ざける原因になったに違いない³⁹⁾。事実、聖堂の管理・運営に関し機関誌は一度としてマニャネットの修道士会にふれることがなかった。

両者の関係がうまく行かなかった証拠として、両者間の手紙が一通も残されておらず、ボカベリャの娘婿ダルマッセスと神父間の手紙だけが六通保管されている事実があげられる。つまり、協会創設者と神父との行き違いを知る機会がなかったであろうダルマッセスとの書簡だけが存在するのである⁴⁰⁾。また、マニャネット神父が1869年に提案した聖堂はサン・ホセに捧げた「贖罪聖堂」であったのに対し、ボカベリャの提案は「サグラダ・ファミリア聖堂」であり、しかも「贖罪」という理念は含まれていない。この理念は聖堂が着工された1882年に「サグラダ・ファミリア贖罪聖堂」という正式名称が確立したとき定着したものであった⁴¹⁾。神父の提案が今日の聖堂に直結していたならば、この理念は最初から正式名称に表現されてしかるべきものであろう。

ボカベリャによる聖堂建立提案の経緯

前述したように、協会設立時はカトリック教会再建を目指すネオ・カトリック運動が開始されようとする時代で、人口の都市集中により教会堂の新築が必要不可欠であった。また「サン・ホセ協会」は、たとえ精神的な協会であるとはいえ、協会である以上、会員一同が集会できる物理的な本部というか本堂を持ってしかるべきであろう。初めからボカベリャの頭に聖堂建立の考えがあっても決して不思議ではない。事実ラテラによれば、「ボカベリャの現家族も他界する前の家族も、協会創設時に聖堂建立の考えは彼の頭にあったことを確信している」という⁴²⁾。ただしこの記事は1954年のものであり、マニャネット神父他界五十周年の1951年から積極的に公表され始めた神父説に対抗するための家族からの反論とも受け取れる。いずれにしても一介の書店主が、しかも協会設立が成功するかどうかも全く不明な時点で聖堂建立の提案をするわけにはいかない。機関誌を調査するかぎり、かなり早い時期からボカベリャの頭の中には聖堂建立の思いがあったように見受けられる。そう考えてしかるべき記事が協会機関誌に散見され、聖堂建立の切っ掛けになり得る記事なら何時でもボカベリャは機関誌に挿入しているからである。先ず機関誌創刊号から、古代ローマを例にして世界の平穩のためには常に聖堂を建立しなければならないと説く。1868年11月号ではパリ市がサン・ホセに捧げた教会堂建設に二百万フランを投ずることを決定し、プロテスタントのスウェーデンでも、Gothembourg市にサン・ホセに捧げられた久ぶりのカトリックの教会堂が献堂されたと報じる⁴³⁾。こうした報道を掲載しているうちに前述したサン・ホセがカトリック教会の守護聖人になるという情報が流れ始め、70年のバティカン公会議でそれが決定され、会員数も二十万に急増した。この状況下で、おそらくボカベリャは聖堂建立の可能性が見えてきたに違いない。71年11月

の法王謁見時（会員数三十万）には聖堂建立の考えを抱いていたであろうし、それ故、その帰路ロレットに立ち寄ったのであろう。ロレット訪問の目的は範^{モデ}となる聖堂を見ることにあったと思われるし、この訪問でその模倣を決意したと考えられる。この決意を実現するためには協会員たちを説得し、彼らの同意を得なければならない。それ故、それ以後のボカベーリヤの努力は協会員の総意が聖堂建立に向かうよう結集された。

自らのロレット訪問の記事を発表する一か月前の1872年11月の機関誌にボカベーリヤはこう記す。「もう一つのわれわれの慰みであり、希望はサン・ホセをカトリック教会の守護聖人にするという時宜にかなった法王令に対し、世界のすべての国々がいかにかこれに応じているかを見ることである…サン・ホセへの絶えることのない信仰を尊び、聖堂を建立し、祭壇を設置し、聖像を作り、厳かな家長サン・ホセに敬意を表し数多くの慈善事業が実現されているのだ」⁴⁴⁾。そして、次号でボカベーリヤはロレット教会堂の由来とその教会堂のすばらしさを語り、「この聖堂に滞在する間、われわれの心はどれほどの感動を経験したことであろうか」とそのときの感激ぶりを記す⁴⁵⁾。ロレット訪問が一年前のことであったから、この時点までにボカベーリヤが聖堂建立の提案を編集長のロドリゲス師に明らかにしていたに相違ない。ロレットの感動の記事の前には編集長の手紙が掲載され、そのなかで協会の歴史を語りながら、この六年間で会員数が急増したことを強調し、暗に協会の可能性を示唆した上で、聖母マリアとイエスあつてのホセであるから、サン・ホセへの帰依者はサグラダ・ファミリアの帰依を最終目標としなければならないと説く⁴⁶⁾。つまり、「サン・ホセ協会」が何故ホセだけでなく、聖家族すべてに捧げた聖堂を建立しなければならないかを協会員たちに前以て説明していると考えられるし、ここに協会設立者と編集長との聖堂建立の実現に向けての協働が見られる。ボカベーリヤとマニャネット神父との個人的接触がまだ考えられないこの1872年12月、聖堂建立のための伏線がここまで進展していた。

まだ時期尚早と見て、翌73年9月号ではフィレンツェで天使のマリアとサン・ホセに捧げられた教会堂が建設されることを報道しながら提案する時期を待った⁴⁷⁾。そしてその時期は1874年4月に見出された。ローマで法王の同意のもとにイエスの聖心に捧げられた聖堂建立が計画され、またパリでもモンマルトルのサクレ・クール設計コンペがなされた時であった。ローマとパリでの大教会建築計画を引き合いにだし、「何故、サン・ホセに心より帰依するスペイン人たちがこうした極めて美しい範例に従い、われわれ自身のサグラダ・ファミリアに捧げた教会堂を建立できないというのであろうか？」と、聖堂の建立を提案したのである⁴⁸⁾。ここで別表を見てい

ただきたい。協会の会員数が1869年から72年までの各年度で十万人ずつ増加しているのに対し、それ以後は鈍化の傾向が著しく、73-74年の間は数字も発表されず、それ以後の数字の出し方にも曖昧さが見られる。つまり聖堂建立の提案を初公表した1874年にはボカベーリヤに協会発展の限界が見えてきたに違いなく、この時期を逃しては機会を失すると判断したのであろう。会員たちの反応を見ながら、しばらく様子を見た。その間の1874年8月にも、71年3月19日に着工されたロンドン近郊の国外ミッション神学校にサン・ホセ祭室が建立されたことを告げ、会員たちに刺激を与え続けた⁴⁹⁾。そして翌75年から、ロレットの教会堂を範とした具体的な聖堂提案をし、それまでに集めた資料を矢継ぎ早に公表した後、建設候補地探しの次の段階へと邁進したのである。このように、会員数が急増を重ねた1871年にロレットを訪れ、会員数増加の限界を感じた74年に聖堂の提案をしていることから、ボカベーリヤは諸般の事情を考慮しながら、以前から暖め続けてきた聖堂建立の提案を公にするに至ったと考えることができる。

総論

これまでの分析で明らかとなったことを箇条書にまとめることにする。

1. 「サン・ホセ協会」設立時(1866.12.8)、ボカベーリヤが聖堂建立の思いを抱いていたことは十分に考えられ、機関誌の調査からも相当に早い時期からこの考えをもっていたことが伺い知れる。
2. たとえ第一項の説が否定されたとしても、マニャネット神父が自らのサン・ホセに捧げた聖堂を提案した手紙(1869.6.24)の控えに追記する以前の1892年のボカベーリヤ死亡記事によると、協会設立者はロレット訪問時(1871.11.26)に聖堂建立の着想を得たという。つまり、ボカベーリヤの着想はマニャネットの聖堂提案よりも二年遅いことになる。しかし機関誌の調査によると、マニャネットがボカベーリヤに自らの提案を告げる機会は1872年末まで得られなかった。したがって、両者の出会いは一方から他方に聖堂建立の提案を告げる機会ではなく、同じような聖堂建立の着想を抱いた二人の会遇という性格を持った。しかも両者の提案は単なる偶然の産物ではなく、貧富の差が拡大する産業革命時に労働者の守護聖人であるサン・ホセへの信仰が高まり、ローマ法王がカトリック教会の守護聖人に決定するという機運の高まりを共通基盤として生まれた提案であった。
3. 両者の会遇は、掛け替えのない味方を得たとボカベーリヤを喜ばしたに違いない。それ故、最初のうちは神父の提案を協会設立者は喜んで受け入れたように思われる。聖堂の将来の運営管理の話がボカベーリヤからマニャネットにあったとしても決して不思議ではなく、神

父の手紙が嘘であったとも考えられない。さらに、協会機関誌で聖堂建立の提案が初公表されたのは、あくまでも1874年4月であり、両者が会遇した後に違いないから、マニャネットの提案がボカベリヤに受入れられたと神父には思えたのであろうし、そのように手紙の控えに追記したのであろう。したがって、この追記は神父としては単なる事実を述べたつもりであって、将来物議を醸し出そうとして書き記したものではないはずである。

4. マニャネット神父の善意にもかかわらず、協会機関誌が証言するかぎり、神父は聖堂財政に関わる面では何一つ貢献することができなかった。言葉の人ではなく、実務肌の実行派であるボカベリヤにしてみれば、聖堂実現のための急務である建設地の入手に言葉だけで具体的な助力が何一つできないでいる神父を見るにつけ、苦苦しく思えたに違はなく、度重なる神父の不実行に業をにやし、神父から遠ざかる結果になったのであろう。したがって、マニャネットの手紙に見られる嘆きは自ら蒔いた種が原因しているように思える。

5. 協会の歴史や聖堂の建設史のなかでは神父の出現は決して本質的なものでなく、偶発的なものにすぎない。それらの歴史を調査すればするほど、ボカベリヤの緻密な計算と努力の跡が伺われるし、産業革命が巻き起こした社会情勢に根差したボカベリヤの戦略がサグラダ・ファミリア聖堂を可能にさせたもののように思える。こうした意味でも、ボカベリヤこそ「サン・ホセ協会」の設立者であると同時に、聖堂建立の実質的な提案者と結論づけることができるはずである。

6. サグラダ・ファミリア聖堂は、産業革命がもたらした都市部の人口急増に対処するためカトリック教会とか、国家とか、あるいは地方公共団体などが新しい拡張地区での宗教・道徳教育の拠点として、精神的な必要姓を満たす目的で建設された物理的容器としての教区教会堂の類のものではない。また聖堂建立が初公表された1874年の会員数はすでに四十万を突破しており、この人数を収容できる聖堂の建設は元来不可能であったから、会員を一堂に会するという物理的機能も聖堂建立の目的ではあり得なかった。事実、この目的に関する記述は機関誌には一切見られない。したがって、この聖堂は会員たちが年に一度か、あるいは一生に一度訪れるための「サン・ホセ協会」の本堂としての機能を持つであろうし、本堂であるならば、それにふさわしい表徴性や象徴性が要求されるはずである。「サン・ホセ協会」が精神的な団体であったように、この聖堂も物理的必要性を満たすものでなく、精神性の極めて高い聖堂と言える。それゆえ、こう結論することができるのではなかろうか。サグラダ・ファミリア聖堂とは、産業革命がもたらした急激な社会変革のなかでもっとも虐げられた貧しい人々、すなわち科学・進歩主義が謳歌された新社会に取

り残された素朴で伝統的な人々がサン・ホセにすがり、神に救いを求め、自らの熱心な信仰心を表明するための聖家族に捧げられた大記念碑であり、ある意味で宗教心に熱狂した中世の、恐れ多くも慈悲深い神に捧げられたカテドラル（大聖堂・大会堂）、すなわち「神の家」、したがって「天上の王国」を象徴するものに等しい性格を持つ。こうした理念と性格を持った聖堂がボカベリヤの努力で着工されるまでになった。この精神を具体的な建築形態に表現する作業がガウディに課せられたのである。

もしマニャネット神父の提案がサグラダ・ファミリア聖堂の建立に直結していたとしたら、ボカベリヤと娘夫婦フランシスカとグルマッセスが相次いで死去したとき（1892-93）、その後継者が幼かったため、マニャネット神父が率いる修道士会が聖堂建設を運営する可能性が十分にあったことであろう。その場合、今日のような未完成の聖堂にはならなかったであろうし、新バルセロナのシンボルにも、カタルーニヤの理念を象徴する聖堂にもなり得なかったに違いない。なぜなら、修道士会の組織力が最大限に発揮され、ガウディの手綱を引き締め、建築家から芸術家としての自由を奪い、物理的必要性を満たすだけの単なる修道士会付属の教会堂として完成していたであろうことが十分に考えられるからである。事実、われわれは似たようなケースを二度経験している。1895年、当時のバルセロナ司教カタラー Jaime Catalá（在位、1883-99）卿が第一回目のサグラダ・ファミリア聖堂建設委員会⁵⁰⁾を設立したとき、ガウディは何の要請も受けず、建築家としての自由を束縛されることもなかった。しかし、次の司教モルガーデス José Morgades（在位、1899-1901）卿は建築家に聖堂図面の完成を要請したのである⁵¹⁾。幸いにして司教が急逝したため、ガウディはこの要請から開放され、芸術家としての最大限の自由を取り戻すことができた。二度目はガウディが没した後の1930年、イルリータ Manuel Irurita 卿が司教のとき、サグラダ・ファミリアが「サン・ホセ協会」の聖堂であることを忘れ去り、突然地域の教区教会堂に転身させたのみならず、1935年には、工場のような鉄骨小屋組で聖堂を覆い、それでもって聖堂の完成にしようと司教区の上層部は考えたのである。この企てから聖堂を救出したのがマルティの司教への「公開質問状」⁵²⁾であり、そのすぐ後、スペイン内戦が勃発したため、この件はうやむやにされた。論者がこの論文で聖堂の提案者にこれほどこだわった理由は、同じようなことが再度起こることを恐れたからであり（たとえば、マニャネット神父説が定説化されれば、その修道士会がいつの日か聖堂を牛耳る可能性があった）、ガウディによってここまで作り上げられた聖堂が建立当初の理念に従った信仰心の象徴であり続けることを願うからであり、ガウ

ディが聖堂にかけた命を尊重しなかったからである。

謝 辞

本稿の作成にあたりましては、東京工業大学教授（名古屋工業大学教授併任）内藤 昌博士のご指導とご助言を得ましたことを、ここに感謝申し上げます。

注・参考文献

- 1) 入江正之：アントニオ・ガウディ・イ・コルネット研究，日本建築学会論文集，第301号，pp.161～170，昭和56年12月
Chueca Goitia, Fernando：拙著 *El mundo enigmático de Gaudí* (Madrid, Instituto de España, 1983) の序文
ガウディの文献目録は，George R. Collins によって *Antonio Gaudí and the Catalan Movement, 1870-1930* (Charlottesville, The Univ. Press of Virginia, 1973) にまとめられている。なおガウディの生前の文献については José F. Ráfols 著 *Gaudí* (Barcelona, Ed. Canosa, 1929)，および前掲拙著の参考文献に詳しい。拙書を受け次書ではさらなる文献の発掘がなされた。Bassegoda Nonell, Juan： *El gran Gaudí*, Sabadell, 1989
- 2) Rojo Albarán, Eduardo： *Antonio Gaudí, ese desconocido：El Park Güell*, San Cugat del Vallès, Los libros de la Frontera, 1987, p.20. 寿里順平訳，ガウディのバルク・グエル，東京，東洋書店，1989, p.11
この本のほぼ半分の百頁を割き，第一章から第三章を既存の主要ガウディ文献の批判に当てる。
- 3) 聖堂最終案を網羅的に扱った研究書の代表例は，既に古典書とも言われる Isidro Puig i Boada 著 *El Temple de la Sagrada Família*, Barcelona, Ed. Barcino, 1929, 同書スペイン語版 *El Temple de la Sagrada Família, síntesis del arte de Gaudí*, Barcelona, Ed. Omega, 1952, 同書増補版，Barcelona, Nou Art Thor, 1979であり，日本では今井兼次氏の聖家族聖堂御誕生の玄関に投入せられた宗教的諸形像，日本建築学会報告集，第69号，pp.689～696，昭和36年10月などがあげられる。その他の，例えば着工以前の聖堂前史などが如何に研究されていないかは次書でも典型的に示されている。入江正之著，アントニオ・ガウディ論，早稲田大学出版部，1985。聖堂を扱う最初の九行（p.301）で修道会を教区と誤解したため，次のような誤りが指摘できる。（メルセード）教区⇒修道会；区長⇒修道士，後の修道会会長；聴罪司祭⇒この職務は不適切で，神父とでもするところ；（彼＝ボカベリャは）1874年頃ローマ巡礼⇒1871年ローマ法王への謁見；（ボカベリャは）教区（の建築家）⇒教区担当の建築家の職務はなく，あるのは司教区だけ；「革命運動」の表現は疑問；（注88）（創刊号）11月⇒12月
- 4) Casanelles, E.： *Gaudí 1965, 5 - La Sagrada Família, obra de pasado*, La Vanguardia Española, Barcelona, 1965.12.23, p.53
- 5) Asociación espiritual de devotos de San José. 本稿では「サン・ホセ協会」と略記する
- 6) El Propagador de la devoción a San José, Barcelona 発行，本稿脚注では El Pro. と略記する
- 7) 本論は，聖堂提案者を主題とした拙論， *Inspirador del Templo de la Sagrada Família, ¿El P. Mañanet o Bocabella?*, (Madrid, 1984.2.7作成，カタルーニャ工科大学・バルセロナ建築学部・ガウディ記念講座，カタルーニャ建築家協会，バルセロナ司教，マニャネット神父の修道士会，サグラダ・ファミリア聖堂建設委員会に提出。それ故，注1)のガウディ記念講座教授 Bassegoda の著作では（p.209），拙論の結果だけが利用されている）を基礎としている。しかし，この西語論文は聖堂の建立提案者が誰であるかを扱っただけで，序論で述べた当時の社会情勢や協会の性質，あるいは聖堂の初期理念などは論じていない。
- 8) *Exposición al Exmo. Sr. Obispo de Barcelona*, El Pro., Vol.1, No.1, p.1, 1866.12.8； *La Solicitud de creación de la Asociación Josefina y su revista*, Templo（協会機関誌），Vol.100, No.9, p.2, Barcelona, 1966.9. この申請書は同機関誌に何度となく掲載。この最初の部分は注3)の入江正之氏の書（pp.333～4，注88）に邦訳されている。
- 9) *Aprobación del mismo*, 同上 El Pro. 創刊号の二番目の記事； Ratera, Federico： *Aspectos de nuestro templo, Génesis del Templo*, Templo, Vol.88, No.11, pp.6, 12, 1953.11. この認可書も同機関誌に頻繁に掲載される。
- 10) Rodríguez, José María： *Carta de nuestro Rmo. P. Director, Nuestra asociación josefina*, El Pro., Vol.7, No.1, pp.6～15, 1872.12.8
- 11) *La Asociación espiritual de devotos del glorioso patriarca San José*, Templo, Vol.96, No.3, pp.4～5, 1962.3
- 12) これらの数字は，注10)の記事，および El Pro. の次の号を参照。1867.11；1869.1；1869.11；1870.11；1870.12；1871.11；1871.12；1872.7；1872.11；1873.2；1874.3；1875.4；1876.4；1877.5；1877.12；1879.3；1880.4；1881.7
- 13) *Boletín del Culto de San José*, El Pro., Vol.11, No.1, pp.24～6, 1876.12；Vol.12, No.3, pp.88～92, 1878.2
- 14) Rodríguez, José María： *Carta de nuestro Rmo. P. Director*, Vol.5, No.1, pp.6～14, El Pro., 1870.12.8； *¡León XIII es nuestro hermano!*, El Pro., Vol.14, No.1, pp.6～7, 1879.12.8
- 15) *D. José María Bacabella y Verdaguer*, El Pro., Vol.26, No.9, pp.228～38, 1892.5.1. ボカベリャ死亡記事
- 16) マニャネット José Mañanet y Vives (1833-1901) は，1859年以来セオ・デ・ウルヘル Seo de Urgel 司教区の様々な聖務につく。1865年からは故郷の Tremp (Lérida 県) の教区教会堂司祭。その前年にサン・ホセ学院 Colegio de San José を同地に設立。この学院が Hijos de la Sagrada Familia Jesús, María y José（聖家族イエス・マリア・ホセ修道士会）の前身となり，青少年へのカトリック教育を目的としてカタルーニャを中心に多数の学院を創設する。マニャネット神父がサグラダ・ファミリア聖堂の提案者とする説を擁護する人々はすべてこの会に所属する神父たちであり，次書で流布される。Blanquet, J.M., and Piquer, J.： *José Manyanet, Profeta de la familia*, Madrid, Biblioteca to Autores Cristianos, 1984, pp.222～43, *Inspirador del templo de la Sagrada Familia (1869-1893)*; Quintana, Antonio： *Manyanet, Bocabella, Gaudí, tres nombres para un gran templo*, La Sagrada Familia, No.1283, pp.10-3, Barcelona, 1983.1-2； *Manyanet, Bocabella, Gaudí, tres grandes para*

- un gran templo*, Barcelona, Hijos de la Sagrada Familia, 1985
- 17) バルセロナ, Les Corts 地区, Joaquín Ruyra 庭園
 - 18) 枢機卿の演説は 1982 年 3 月 19 日, 法王のそれは同年 12 月 7 日, それぞれ建設中の聖堂で行われた。
 - 19) 司教, José Caixal y Estradé (1803-79)
 - 20) この手紙は神父自身の控えとして, コピー機のない時代に自らコピーした控え用写しとして存在する。この控えの一頁目の左肩には「コピーである」と記されている。注 16) のバルセロナの「聖家族修道士会」所蔵
 - 21) Mainardi, Lorenzo : *Invitación a nuestros queridos asociados*, El Pro., Vol. 3, No. 10, pp. 290~95, 1869. 9. 8. ローマで書かれたこの記事の日付は同年 8 月 7 日
 - 22) Collins, Peter : *Changing ideals in modern architecture (1750-1950)*, London, Faber & Faber, 1965; *Los ideales de la arquitectura moderna, su evolución (1750-1950)*, Barcelona, GG, 1973, p. 105
 - 23) Navascués Palacio, Pedro : *Arquitectura y arquitectos madrileños del siglo XIX*, Madrid, Instituto de Estudios Madrileños, 1973, p. 210
 - 24) *Sacra Congregatio Pro Causis Sanctorum Officium Historicum 73 : Barcinonen. Beatificationis et Canonizationis servi dei Josephi Mañanet y Vives, Fundatoris congregationis fillorum sacrae familiae et instituti missionarium filiarum a Sacra Familia de Nazareth (†1901)*, Romae, 1978. マニャネット神父の伝記については最も詳しい。
 - 25) Lledós y Mir, Miguel : *Historia de la antigua villa hoy ciudad de Tremp*, Barcelona, 1917, p. 132
 - 26) *Noticias de los cultos que nuestra Asociación dedica a San José*, El Pro., Vol. 7, No. 1, pp. 15-19, 1872. 12. 8
 - 27) 注 24) の書, pp. 345~6
 - 28) *Boletín del culto de San José*, El Pro., Vol. 8, No. 3, p. 90, 1874. 2. 8; *Fovores alcanzados por intercesión de San José*, No. 5, p. 147, 1874. 4. 8; 同上タイトル, No. 6, p. 179, 1874. 5. 8; *Boletín del culto de San José*, 同上号, p. 183
 - 29) Rodríguez, José Maria : *Carta de nuestro Rmo. P. Director, Imágenes de San José* (Roma, marzo de 1874) El Pro., Vol. 8, No. 5, pp. 130~5, 1874. 4. 8
 - 30) *Un templo dedicado a la Sagrada Familia*, El Pro., Vol. 9, No. 3, pp. 84~7, 1875. 2. 8
 - 31) 注 15 参照 (ボカペーリヤ死亡記事)
 - 32) Rodríguez, José María : *Carta de nuestro Rmo. P. Director, El sexto año de nuestra Asociación*, El Pro., Vol. 6, No. 1, pp. 6~19, 1871. 12. 8; *A mis queridos hermanos, el editor y administrador del Propagador*, El Pro., Vol. 6, No. 2, pp. 40~3, 1872. 1. 8
 - 33) *La Santa Casa de Nazareth en Loreto*, El Pro., Vol. 7, No. 1, pp. 19~24, 1872. 12. 8
 - 34) *Revolución española en 1868. El Padre Mañanet queda encargado de la parroquia de Tremp. Proyecto de un grandioso templo on honor de San José. Templo de la Sagrada Familia*, La Sagrada Familia (マニャネットの修道士会の機関誌, 1899 年創刊), Vol. 21, No. 16, p. 249~51, Barcelona, 1919. 8. 16
 - 35) Blasco, Juan : *Cartas al director, Las obras de la Sagrada Familia*, Destino, II Época, Vol. 28, No. 1442, p. 3, Barcelona, 1965. 3. 27
 - 36) バルセロナから発信されたトレンプの Francisco Puigcerdá に書かれた手紙, バルセロナの Instituto de Religiosos Hijos de la Sagrada Familia 所蔵
 - 37) 聖堂が建立されている地区の San Andrés de Palomar で 1882 年 4 月 6 日に書かれ, トレンプの Mullos 神父にあてられた手紙, 前注の修道士会所蔵
 - 38) *El Templo de la Sagrada Familia*, El Pro., Vol. 11, No. 3, pp. 82~7, 1877. 2. 8
 - 39) 注 34) の記事の根拠は注 36) の手紙に基づく。この手紙では聖堂とマニャネット神父とを引き裂こうとする意図のあることが述べられている。
 - 40) ダルマッセス Manuel de Dalmases (1843~93) は 49 歳で若死にしており, 残されているマニャネット神父との書簡は 1890 年代のものばかりである。したがって, 1870 年代の神父とボカペーリヤとのまづい関係を忘れた頃の書簡
 - 41) この聖堂の正式名称 Templo Expiatorio de la Sagrada Familia (聖家族贖罪聖堂) の Expiatorio (贖罪の) は建立提案時には付けられておらず, 聖堂建設への献金システムが確立される過程で追加された形容詞である。それゆえ, 初期理念を扱う本稿ではこの問題を扱わず, 別の機会に譲ることにする。
 - 42) Ratera, Federico : *Aspectos de nuestro Templo, nuestra Asociación josefina*, Templo, Vol. 89, No. 9, pp. 6~11, Barcelona, 1954. 9
 - 43) *A nuestros apreciables suscriptores*, El Pro., Vol. 2, No. 12, pp. 378~80, 1868. 11. 8
 - 44) *A nuestros consocios*, El Pro., Vol. 6, No. 12, pp. 378~80, 1872. 11. 8
 - 45) 注 33) 参照
 - 46) 注 10) 参照
 - 47) *Boletín del culto de San José*, El Pro., Vol. 7, No. 10, p. 315, 1873. 9. 8
 - 48) 注 29) 参照
 - 49) *Boletín del culto de San José*, El Pro., Vol. 8, No. 9, pp. 275~82, 1874. 8. 8
 - 50) Casas y Palau, José : *Nós Doctor D. Jaime Catalá y Albosa* (Decreto que publica el *Boletín Oficial Eclesiástico*, 1895. 8. 14), El Pro., Vol. 29, No. 17, pp. 446~52, 1895. 9. 1
 - 51) *El Templo de la Sagrada Familia*, Diario de Barcelona, No. 19, pp. 833~6, Barcelona, 1915. 1. 19; Martí Matlleu, J. : *Historia de la Asociación josefina*, La Hormiga de Oro, Vol. 15, No. 11, pp. 43~4, Barcelona, 1923. 3. 17
 - 52) Martí Matlleu, Juan : *Carta Abierta al Rmo. Sr. Obispo de Barcelona, Dr. D. Manuel Irurita Almándoiz*, Barcelona, 1935. 12

(1991 年 12 月 10 日原稿受理, 1992 年 6 月 16 日採用決定)